
日本の武道文化の成立基盤—新陰流と一刀流剣術の研究を通じて—

研究代表者 魚住孝至

共同研究者 立木幸敏、吉田鞆男¹、仙土克博¹、長南信之¹、
大保木輝雄²、朴周鳳³、中嶋哲也³、宮本光輝⁴

1 古流剣術研究会、2 埼玉大学、3 早稲田大学、4 国際武道大学大学院

本年度は、4年間の科研費基盤研究（C）の研究を仕上げることを目指して、同じテーマで同じメンバーで単年度のプロジェクトを組んだ。

今年度の調査は、新陰流の基になった陰流の16世紀末の古い目録があることが判明したので東京国立博物館に、一刀流で江戸後期からの伝統を持つ甲源一刀流について秩父の逸見宗家に、古武道振興会について齋藤聡会長宅へそれぞれ伺い、いずれも大きな成果があった。それぞれの調査で判明した内容の概要をまず書いた。

また今年度は、陰流の「猿飛」（「燕飛」）の刀法について、四つの古文献の叙述に基づき、元来の形を推定・復元する研究を行ったので、その成果を「陰流・新陰流勢法「燕飛」の研究」として報告した。

陰流の「猿飛」は16世紀後期の中国の『紀效新書』にも掲載された剣術の古い形であるが、新陰流に「燕飛」として術技が伝承され、尾張柳生家系統では今日まで稽古されている。新陰流は17世紀初期から江戸柳生系と尾張柳生系に分かれたが、「燕飛」の仕様を書いた最も古い尾張系の『討太刀目録』（1685年）と、江戸系の『見解註解』（1695年頃）、『新秘抄』（1716年）、『燕飛聞書』（1814年）の叙述を合わせて元来の勢法の仕様を研究した。

「燕飛」各本の本数と技の名称は江戸系と尾張系で異なるところがあるが、元来は1本ずつ区切らず一連の続け遣いだったので、その分節の違いによるもので、技自体は両系でもほぼ共通していることが分かった。四つの文献の叙述を打太刀・仕太刀の所作を分析・照合して元来の稽古の形を推定・復元した。その演武を分解写真にして載せ、各文献の叙述と対応させた。

「燕飛」の中には新陰流の形の刀法が随所に見られることから、流祖上泉信綱は、新陰流が成立した基の刀法を各自が吟味できるように、陰流の「猿飛」を新陰流の中に取り入れて伝えたと考えられる。

現代武道の諸問題VI 各武道の現状と問題点（総括）

研究代表者：柏崎克彦（国際武道大学）

共同研究者：魚住孝至、大矢稔、松尾牧則、立木幸敏、矢崎利加、井下佳織（国際武道大学）、
木村恭子（国際武道大学客員教授）、アレキサンダー・ベネット（関西大学）、
金野潤（日本大学）、山田利彦（了徳寺大学）

本プロジェクトは、2009年以来、柔道、剣道、弓道、空手道、合気道、なぎなたのそれぞれの立場から、共通に設定したテーマやそれぞれの武道で直面する問題について論じてきたが、今年度は、それらを総括するために、学内の教員と木村氏が一同に会した座談会を行って、共通理解を深めるとともに、さまざまな問題についてより突っ込んで考えてみることにした。

座談会は、2013年2月14日（水）に行われた。出席者は、各武道の立場から、各連盟の動向を踏まえながら個人の責任において、以下のテーマについて、約3時間にわたって熱心に話し合った。本稿は、その記録を整理したものである。

1. 2012年度から実施された中学校武道必修化への対策および課題について
2. 各武道で、現在直面している問題は何か？
3. 勝利至上主義と武道の特性について
4. 武道の技の特性について
5. 各武道における形試合について
6. 各武道の国際化の問題
7. 各武道のこれからの展開について

「武道健康論」研究 —健康生成論を手掛かりに—

代表研究者 石塚 正一（国際武道大学）
共同研究者 小林 啓三（国際武道大学） 園部 豊（日本体育大学）
阿久津洋巳（岩手大学）

要旨 アントノフスキーが提唱する首尾一貫感覚（SOC）の発達は、いかなる要因が関与するのか、自己決定動機づけ理論とトランスセオレチカルモデル（TTM）からアプローチを試みた。本研究は、18歳から24歳の大学生を調査対象とする横断的研究である。対象者は一般学生、武道系学生、スポーツ系学生の三群から構成され、東北地方、関東地方、関西地方の総合大学および体育系大学からデータが収集された。

自己決定動機づけ理論のアプローチでは、健康維持活動に対する自己決定動機づけの低い「非動機づけ」段階にある者はSOCが低いこと、積極的に健康維持活動に動機づけられている「内発的動機づけ」段階にある者ほど、SOCが高いことを明らかにした。動機づけは動機づけだけの問題ではなく、向社会的行動、主観的幸福感、社会活動への積極的関与など肯定的な社会的行動や態度と関連があることが従来の研究で明らかにされており、SOCの発達に対する積極的な関与が明らかになった。

TTMのアプローチでは、武道スポーツ系学生におけるTTMの体験的・認知的プロセス得点、および行動的プロセス得点が一般学生よりも高いことが明らかにされた。これは武道スポーツ系学生が普段から競技上のストレスに曝されているために、ストレスに対抗する能力を高めたためであろうと考えられる。またSOCは自己効力感と正の相関があり、自己効力感の高い者ほどSOCが高い。さらにSOCが高い学生アスリートは、ストレスマネジメント行動継続のための変容プロセスにおいて、行動的プロセスをより多く行っていること、SOCが高い大学生アスリートは、ストレスマネジメント行動による恩恵知覚、体験的・認知的プロセス、自己効力感から、ストレスマネジメント行動の変容ステージが規定されていることが明らかとなった。

清代前期（1644-1840）における武術の実態に関する研究 （和文要旨）

今年度のプロジェクトにおける研究内容とその要旨は以下の通りである。

I. 研究の内容

1. 清の軍隊武術の形態と武科挙の発展変化（清軍の武器装備とその訓練の実態、武科挙の変化） 2. 民間武術の発展変化（民間宗教・秘密結社による武術の伝播と発展、武術と「運氣」を合わせた練習方法の成立、武術門派の多様化、民間武術家の活動） 3. 代表的な武術著作、 4. 少林武術の発展、 5. 盛んな相撲活動（清における相撲活動と善撲營の設立、モンゴル族の相撲）

II. 研究要旨

清代前期は明代の後を受けて民間武術の発展が新しい段階を迎えた時期である。

満洲民族は弓矢によって天下を定めたため、騎射を最も重視していた。八旗は騎射を本務とし、併せて長槍・攬鋌・長刀・大刀などを訓練した。一方、緑營における訓練内容は非常に雑多で、民間武術が軍隊武術に与えた影響の大きさを窺い知ることができる。

また、この時期は民間宗教と秘密結社の活動が盛んで、これらの組織では拳棒の練習と気の鍛練が共に行われた。これらのことは明代から発展を始めた民間武術の伝播と発展を促進する役割を果たしただけでなく、武術家が導引行気を併せて行うようになる契機ともなり、民間武術の内容はさらに豊富なものとなった。

この時期の民間武術は門派の形成とその体系化、理論化、套路化がより一層進んだことに加え、道教が大衆化したことによって気の鍛練を兼ね備えることが重視されるようになり、拳術や武器の鍛練と気功を併せて行うことが一般化した。こうした変化は中国の民間武術が多彩な鍛練形式を有し、健康増進、護身防衛、演武娯楽等の作用と機能を備えた民族体育・スポーツに発展、昇華したことを示していると言える。

また、清朝が騎射、相撲等の北方民族の伝統体育活動を重視し、特に相撲が非常に盛んに行われた点は注目に値する。軍中に「善撲營」が設けられ、民間にも高い技術を持った相撲選手が存在した。相撲活動は聖節御宴の表演項目であっただけでなく、民間でも試合や演武が盛んに行われ、その人気は廃れることがなかったのである。

【キーワード】 軍隊武術 武科挙 民間武術 武術著書 少林武術 相撲

障害者による武道事例の調査研究 —中学校武道必修化を契機としたインクルーシブ教育の実現に向けて—

松井完太郎 蒔田 実 柏崎克彦 高見令英 丸橋利夫 木村寿一 矢崎利加

アニカ・ナスルンド* アレキサンダー・ベネット** 阿部哲史***

ポントス・ジョハンソン**** 中島 たけし***** 濱田初幸*****

(* ルレオ工科大学 ** 関西大学 *** ブタペスト タンカプヤ仏教短期大学

****ABCD スウェーデン ***** 国士舘大学 ***** 鹿屋体育大学)

Kantaro MATSUI, Minoru MAKITA, Katsuhiko KASHIWAZAKI, Yoshihide TAKAMI,

Toshio MARUHASHI, Toshikazu KIMURA, Rika YAZAKI, Annika NÄSLUND*,

Alex BENETT**, Tetsushi ABE***, Pontus JOHANSSON****, Takeshi NAKAJIMA*****,

Hatsuyuki HAMADA*****

(*Luleå University of Technology, **Kansai University, ***A Tan Kapuja Buddhista Egyház

****ABCD Sweden, *****Kokushikan University *****NIFS)

2012年8月に開催したワークショップ「2012 Global workshop in Japan 中学校武道必修化を契機としたインクルーシブ教育の実現に向けて」についての報告。このワークショップは、これまでの調査・研究をベースとしながら、中学校体育における武道必修化が定められた新しい中学校学習指導要領に基づく授業が2012年度に始まったことを受けて、国際武道大学と国士舘大学武道徳育研究所の共催、文部科学省他の後援で開催したものである。

1969年から体育授業の単元として柔道指導を行っている東京都立青鳥特別支援学校における事例、知的障害がある生徒による剣道部活動を行っている東京都立白鷺特別支援学校での事例、そして富山県立富山総合支援学校における運動会に向けた空手道指導事例などを、実際に指導に関わる教員を招いてセッションを実施した。

指導における工夫は、生徒ひとりひとりに個別特有な側面がある。しかし、生徒の状況説明（事例によっては直接インタビュー）や、工夫の趣旨説明を通じて、汎用可能な障害者特有の指導法のヒントとして読むこともでき、また健常者にも応用できるという情報として読むことができる。このことは、障害者武道が中学校武道必修化を契機としたインクルーシブ教育実現の入口になることを象徴している。

インクルーシブ教育とは、単に学ぶ場の統合ではない。そのバランス点は、生徒の状況などに応じて常に変化し続けるということが、ワークショップを通じて共有化された。

大学女子剣道競技者の体力特性 —筋パワーを中心として—

プロジェクトの分類	一般公募
研究期間	2012年4月～2013年3月
プロジェクト代表者氏名・所属部署・職名	井上 哲朗（スポーツトレーナー学科・准教授）
共同研究者(所属)	岩切 公治 矢崎 利加 櫻井 健一 井下 佳織

本研究では、女子剣道競技者を対象としての筋パワーを中心とした体力測定を行い、体力特性を明らかにし、基礎資料を得ることを目的とした。その結果は、以下の通りである。

すべての周径囲において、左右差が認められた。上腕囲、前腕囲、及び大腿囲では右側優位、下腿囲では、左側優位の左右差が、認められた。

絶対値、体重値ともに脚伸展パワーにおいて右脚優位の左右差が認められた。

自転車ペダリングパワーに関しては、体育学部女子学生145名の測定を行った報告よりも低い値であった。

平均値と標準偏差から求めた5段階評価表を作成した。この表を用いれば、女子剣道競技者の筋パワーを簡単に評価できると考えられる。

国際武道大学 ならび 同大学附属武道・スポーツ科学研究所で学んで
～平成 24 年度客員研究員(長野県教職員長期研修派遣制度)
としての研修を通して～

山田良徳

この報告書では「有酸素運動の理論と実践を利用したトレーニング方法とその『体づくり運動』への活用」をテーマに自らの体を使い実験実践をしたものである。

実験実践は ①スポーツと心拍数や ②運動強度の設定の仕方や測り方、また ③体重・体脂肪は有酸素運動でどのような変化が起こるかについて「RPE（主観的運動強度）」や「有酸素運動の効果」などの面より実験し、簡単なコメントをつけてまとめてみた。

その結果として RPE のめやすと運動直後の心拍数が概ね一致することや健康体維持の有効な手立てとなる可能性があることが理解できた。

それらの結果を考慮し、「体づくり運動の授業プログラムの例」を作成し、掲載したものである。また、その他として「授業作りやトレーニング方法論としての参考例」についても掲載した。

【キーワード】 有酸素運動 運動強度 RPE 心拍数 体づくり運動